第61回県少年の主張大会―いま伝えたい私のメッセージ（主催―山形新聞、山形放送、県防犯協会連合会、県青少年育成県民会議など）が9月25日、山形市の山形国際交流プラザで開かれた。地区予選、ブロック大会を経て中学生15人が出場。戦争や夢、人との違いなどをテーマに思いを発表した。最優秀、優秀、優良の各賞に輝いた5人の主張を紹介する。

第61回県少年の主張大会　入賞者のメッセージ

最優秀　鶴岡市櫛引中3年　渡部 香子さん

伝えゆく戦争の痕跡

映画を見終えた後、私の頬に大粒の涙がこぼれていました。そして、幼い頃の記憶がふとよみがえりました。

「香子、この写真はね、おじいちゃんとおばあちゃんが子供の頃の写真なんだよ」。そこには、軍人さんと戦闘機が写っていました。他にも10歳の男の子が亡くなったことを伝える手紙も見せてもらいました。まだ幼かった私は、祖父母が伝えたかったことがよく分からず、軍人さんを「かっこいいね」と無邪気に答えただけでした。

その映画は、太平洋戦争末期の沖縄戦を生き抜く家族の様子を描いた「さとうきび畑の唄」という作品です。平和学習の一環として、学年全員で鑑賞しました。それから1年近くたつ今も、映画の内容はもちろん、見終わった時の気持ちやその時の様子が鮮明に思い出されます。

そして、祖父母の話を思い出したことをきっかけに私は改めて、家族から戦争について聞いてみました。私の曽祖父も戦場で何度も命の危機を感じた軍人の1人でした。仲間が次々と戦場に倒れながらも死に物狂いで生き抜いたそうです。祖父は、終戦を満州国で迎えました。戦後の混乱を避けるため、子供だった祖父は数年、中国に置いて行かれたそうです。もしあの時、祖父を迎えに行く人がいなければ私はここにいなかったでしょう。また、映画を見た時に思い出した、幼い頃の記憶は戦争が他人ごとではなく、身近なものだと強く訴えられているように感じ、胸が締め付けられる思いでした。そして、当時を知らせてくれる写真や手紙を残し、幼い私になぜ祖父母がこれらを見せてくれたのか、その意味がはっきりと分かりました。私たちのような戦争を知らない若い世代に、きっと祖父母は戦争のむごさや繰り返してはいけないということを伝えたかったのです。

私は今年の7月、私の住む櫛引地域の戦没者追悼式に参加しました。遺族会の方々の前で平和へのメッセージを発表するためです。祖父母の思いを受け継ぎ、戦争を繰り返さないという強いメッセージを発信しました。追悼式終了後、私は多くの方に声を掛けられました。

「あの時から、かなりの時間が過ぎたんだね。それでも当時を忘れることはないし、あなたの平和へのメッセージを聴けて本当にうれしかったよ」

「どうかこれからも、戦争を許さないという強い気持ちを持ち続けてくださいね」

私にとってこの経験は大きなものとなりました。戦争に関わる表面的な記録だけでなく、身の回りに残された戦争の痕跡や戦時中の気持ちも伝えられる人になりたいと、決心した瞬間でした。

世界を見渡すと、今も戦場で苦しんでいる人が大勢います。ロシアとウクライナで一般人が犠牲になった事実を毎日のように報道で知るたびに、戦争の悲惨さに胸が痛みます。このようなことが日常にない世界を私たち若い世代がつくらなくてはなりません。

なぜあの「さとうきび畑の唄」は涙を誘ったのでしょう。私は戦争によって本人の意思に反して多くのものが奪われたからだと思います。だから私は戦争に強く反対します。映画を見た多くの人が泣いたように、人類共通の大切なものが奪われる怖さをすべての人が心の奥底で感じるのだと思います。理不尽な戦争を進めている人たちにもその気持ちが必ずあるはずです。しかし、彼らはその気持ちが隠れてしまっているのではないでしょうか。世界中の人々の心の奥底にある、理不尽に奪われることへの恐れや怒りを引き出せるよう、戦争の痕跡を伝えられる人になりたいです。

今、ここに生きるすべての人々は先人の犠牲の上にこの生活があることを決して忘れてはいけません。身の回りの戦争の痕跡に触れたり、戦時中の気持ちに思いを巡らせたりといった小さなことが、戦争のない平和な世界をつくるという大きな夢をかなえるきっかけになると、私は信じています。戦争は決して許されるものではありません。私の知る戦争の痕跡を伝え続け、多くの人の心を動かしたいです。

優秀　鶴岡二中3年　石川芽衣さん

夢を描く

私はピアノの先生になりたい。

私は俳優になりたい。

私は音楽教師になりたい。

私は声楽家になりたい。

幼い頃から現在に至るまで、真っ白なキャンバスに描いてきた私の夢だ。15年の人生においてすてきな出会いをし、それぞれの輝きを放っている方々の影響を受け、その都度描き足してきたキャンバスはカラフルで楽しげな音色を響かせている。幼い頃からおもちゃのマイクを持ち、机の上で歌い踊っていた。ポジティブな私は明るい未来を想像して、目を輝かせている。

しかし、私は夢ばかり見ていられない中学3年生。進路について真剣に考えなくてはいけない。先生をはじめ、ご指導くださる方々に相談するとより現実的に、より安定した職業やプロセスを考えるよう促されることが多くなった。

大丈夫？　そんなに甘くないよ？

私のことを大切に思い、幸せな人生を送ってほしいと願うからこその言葉だと理解している。ここからの数年が進路を決めるのに重要であることも理解できる。この15年をはるかに超える歳月を働いて収入を得なければならないことを考えると、趣味として楽しんだ方がいいのだろうか。現実とはほど遠い夢は、描くだけで追ってはいけないのか。そんな自分は笑われているのか。

私は浅はか？　世間知らず？

周囲をうかがうが何もなく、冷笑もない。私はどこに向かおうとしているのか。なりたいものは一体何。簡単に答えが見つからない。

私はよく新聞に目を通す。痛ましい事件や事故の記事も多いが、何かを達成もしくは目標を持ち努力している方の記事・写真はみんなすてきな顔をし、読んでいて心地良い。ある日の夕刊のコラムに目を留めた。「我だはゴッホになる！」。何だと思い読み進むと、青森県出身の版画家「棟方志功」が残した言葉であった。棟方は少年時代、オランダの画家ゴッホの作品を見て感動し、将来絵描きになると周囲に話し、後に世界的な版画家となり大成した。きっと色彩豊かな絵画に心を奪われたことだろう。学校の卒業式で、目標を持ち進むように、とのはなむけの言葉として引用することがあるそうだ。私は、ご指導くださった先生からの年賀状や手紙に同じような励ましの言葉を頂いていることを思い出し、改めて読み返した。

夢に向かって突き進め！自分の可能性を信じて！　活躍を楽しみにしている。

情けない。今頃になって心に響く。辺りに何もないのは当たり前。一度足元に目を配り道を作って歩むのではないか。今まで気付けなかった後押しがたくさんあり、足りなかったのは一歩踏み出す勇気。私は一人じゃない。胸を張って歩き出そう。

間違っても恥をかいてもいい。すぐに正解を求めない。私たちの未来に近道はない。効率の悪さや時間の無駄もないのだ。たとえ遠回りでもかなわなくても、その経験はオリジナルの着色料。私たちはまだ若い。何度でもやり直せる。さあ、恥ずかしがらずに夢を語ろう！

私は人生をカラフルにしたい。

私は背中を押せる人になりたい。

私は使用感たっぷり短・長ある色鉛筆のようなミュージカル女優になりたい。

中学生のみんな、声に出してみよう。

質問！　あなたはどんな夢を描く？

優秀　新庄中3年　佐藤亜海さん

これが、私。

小学生の頃の私は、友達の話すことに「そうだよね。私もそう思う」とよく口にする人間でした。話を合わせれば嫌われない。外されることもない。平穏な生活を守る一番の方法だと思っていたからです。しかし、ある日友達が突然そっけなくなり、疎外感を感じるようになりました。話を合わせていても外されるんだ―。声を掛けても避けられる、理由も見当がつきません。そして時折感じる無言の視線。いつも気になって何も手につかなくなりました。早く家に帰りたい―。

「今の亜海のままだったら、将来一人で生きていけなくなるよ。もっと自分を大事にしなさい」。

悩む私に両親はこう言いました。このまま周りの人に心を委ねていったら、私はどうなってしまうのだろう。いつか一人になった時、何一つ決定することができない空っぽな人間になってしまう。「私自身」というものはどこに行ってしまうのだろうと、とても不安になりました。

そして迎えた中1の新学期。私は友達とクラスが離れてしまいました。独りぼっちになったと落ち込む私に、母は明るくこう言ったのです。

「これはいい。自分を変えるチャンスだよ！」

私が大事にしてこなかったのは自分の正直な気持ちでした。私は離れたことをきっかけに、今まで隠してきた正直な気持ちを、これからは誰にでも伝えていこうと決めました。

いろいろな人と話しているうちに、「違い」に対する意識が変わっていくのを感じました。「違い」に対して、あれほどおびえていたのに、当たり前のように「違い」は私の周りに存在していて、その「違い」から、新しい価値観やもっとよくしようというつながりが生まれていったのです。「違いって面白い」。そう思えるようになってから「私はこう思うんだ」と、いつしか抵抗なく口にできるようになっていました。

1年がたち、新しいクラスには昨日離れていた友達がいました。そして「ねえ、亜海はどう思う？」。ついにこの時がきました。緊張の中、きっとここが私の転機だと思いました。

「私はみんなと違うんだけど…」。

この1年の自分の精いっぱいを込めて出した「違う」答えにどんな反応をされるのか。

「ああ！　うん。分かった」

今の自分が受け入れられた驚きと、それ以上の喜びを感じました。違ってもいいんだ。そしてこの瞬間、私は初めて友達と向き合えた気がしました。ごまかさない自分でいることが、友達としての誠実な態度だと思いました。

私は、この経験から気づき、学んだことがあります。それは、変わる自分を受け入れてくれた周りの人の存在です。小学校からずっと同じ集団で生活してきたのですから、前の私を知っている人もいたはずです。「中学デビュー？調子に乗ってない？」。他人との違いがいじめの始まりになることもあると聞きました。しかし、私の周りには、私を否定する人はいませんでした。受け入れてくれた上に「亜海っていろんな人と話してたよね」と笑顔で肯定してくれた人さえいました。前向きな言葉で背中を押してくれた両親もいました。この周りの存在が、今の私を支えてくれていると思います。

私たちはきっと誰でも、今の自分の在り方に立ち止まり、修正しながら大人になっていきます。こんな人でありたいと、ある時から見た目や立ち居振る舞いを変える人もいるでしょう。その変化には理由があり、全て否定することばかりではないはずです。変化の内にあるその人の思いを想像し、違いを「良さ」として受け入れる「心の豊かさ」を、私たちは持つべきだと思うのです。そうすれば、いつでも、誰でも明るい明日に一歩を踏み出せるはずです。

変わる私を認めてくれた人たちに感謝の気持ちを込めて。そして、これから変わりたいという人たちへ、心からエールを込めて、今、胸を張って口にしたい。

これが、私。

優良　鶴岡中3年　石川 結さん

人を思う力

私には、苦しい時、悲しい時、自分のことしか見えなくなってしまう瞬間があります。でも、それは仕方のないことだと思っていました。人を支えられるのは自分に余力のある人だと。

私は脊柱側彎症という病気を患っています。成長とともに背骨がねじれながら曲がっていく原因不明の病気です。

6時間に及ぶ手術は無事終了したものの、術後は痛みや吐き気と闘う日々が続きました。夜も眠れず、一日中泣いていました。「えー。テスト勉強やだな。もう死にたい」。そんなふうな言葉を耳にするたび、「死」はそんなに軽いものじゃないと憤りを感じていた私ですが、こんなのだったら死んでしまった方が楽なんじゃないかとさえ思いました。

病気の不安やつらさと闘う私を支えてくれたのが、母と曽祖母でした。曽祖母は私の話をいつもにこにこと聞いてくれました。しかし、そんな曽祖母は私が手術をした日の夜に息を引き取りました。自分の体調が悪い中でも私を心配してくれた曽祖母。曽祖母はどうして、そんなふうにできたのでしょう。

曽祖母のことが大好きだった母は、私に付き添っていたために最後のお別れをすることができませんでした。私の隣で、泣きながらお別れの手紙を書いている母を見て、申し訳なさに胸がつぶれそうでした。母はこう言いました。「美保。あなたは精いっぱい生きなさい。大丈夫。こんなに大きな試練を乗り越えられたんだから。つらいのは人生のほんのいっときだけ。その倍以上に楽しいことが待っているから」と。悲しくて私のことなんか考えられないだろうと思っていたけれど、それは違いました。自分の心がどんなに張り詰めていても、どんなにつらくても、人を思える力を、人間は持っているのです。

母や曽祖母のような人になりたい。今頃、学校では執行部の仲間が生徒総会の準備の真っ最中。生徒会長として、できることがあるはず。主治医の許可をもらい、リモートで執行部の話し合いに参加しました。生徒会スローガン「太陽」。この言葉に込めた思いをどのようにして伝えたら全校生が同じ方向を向いて成長できるのか、意見を出し合いました。3年生としてこれまでの伝統を引き継いでいかなければならない、そんな気持ちでやりとりをしていると、不思議と体のつらさも忘れてしまいそうでした。

「自分のために」と考えていると、人はうまくいかなかったり、つらかったりした時、意外と簡単に諦めてしまいます。「痛いから何もできない」。そんなふうに思ってしまうのは結局、諦めても困るのは自分だけと思っているからです。しかし、自分の心が自分以外の誰かに向いている時は、そう簡単には諦められません。誰かのために行動したい、そう思った時、人はより強く、よりたくましく生きられるのだと思います。

皆さんの中には「自分を支えてくれる人なんていない」と思う人がいるかもしれません。支えてくれる人がいることは幸せなことです。でも、私は支えることができる幸せも大切にしていきたいです。だって、それは私が生きている証しなのだから。

優良　河北中3年　藤野琴磨さん

世界に目を向けること

果てしなく広がる空。小気味よいリズムを刻む貨物列車。空の青さを映すミシシッピ川。ここは、アメリカ、ミネソタ州。私が6歳から9歳までの3年間を過ごした場所です。この地が、私に新たな気づきを与えてくれました。

アメリカでは、全てが大きく変化しました。中でも特に、学校生活の変化には戸惑いました。英語が話せない不安から、新しい友達はできるか、周りから変な目で見られやしないか、たくさんの心配事が頭の中を埋め尽くしました。

学校に行き始めてからの3カ月は、先生やクラスメートが何を話しているのかはもちろん、私に話しかけているのか、それとも誰かに話しかけているのかさえ分からず、ただただ、聞き流すことしかできませんでした。先生やクラスメートはそんな私に、ジェスチャーを交えて話してくれたり、分かりやすく絵を描いてくれたり、私が理解できるようにたくさんの工夫をしてくれました。そんな周囲の支えもあり、アメリカに住んでいた頃の私は、気づけば日本語よりも英語で会話をする方が得意になっていました。そこには、日本で生活していた頃と変わらない自分がいました。

3年の月日がたち、帰国の時がやってきました。あれだけ長いと思っていたアメリカでの生活も、振り返ればあっという間の日々でした。帰国してからは、アメリカでの生活とは真逆で、日本語での会話がうまくできず苦労の連続でした。しかし、周りには、理解に苦しむ私を見て、簡単な日本語に直して説明してくれたり、困っている時に手を差し伸べてくれたりするたくさんの人の存在がありました。そのおかげで、すぐに日本での生活に慣れることができました。

中学生になり、社会の授業で本格的に歴史を勉強すると、ある出来事に目が留まりました。過去にアメリカが卑劣な人種差別をしていたというのです。アメリカだけではありません。日本でも、部落差別が行われていたことを知りました。さらに調べていくと、差別は時代を超えて、形を変えながら、世界中にはびこっているという現状が見えてきました。今、世界で猛威を振るっている新型コロナウイルスも差別の対象になっているそうです。その事実を知れば知るほど、私は悔しくて仕方がありませんでした。

もし、日本ばかりを見ていたら、アメリカには差別の文化があると勝手に思い込み、私もある種の差別をしていたかもしれません。しかし、私はアメリカで、困っている時に助けてくれたり、親身になって寄り添ってくれたりする多くの人と出会うことができました。国籍や文化の違いを受け入れて、温かく接してくれた第2の故郷は、私たちが暮らすこの日本と何も変わりません。ただ、そう信じて疑わない国も、この日本も、「差別」という問題を抱えています。たとえ、ほんの一部分に過ぎなかったとしても、差別する人が少しでも減ってほしい、それが今の私の願いです。

人と関わる機会を増やすことで、たくさんの経験を積むことができます。文化や生活の違いを学ぶことで、自分の価値観を大きく変えることができます。アメリカに「As many heads, as many wits」という言葉があります。これは「人の数だけ知恵がある」という意味のことわざです。世界にはさまざまな人がいます。同じ人は誰一人として存在しません。そのため、時として考えがぶつかってしまうのは当然だと思います。それでも、互いに尊重し合い、認め合うことで、差別のない、さらに豊かな世界をつくりだすことができるのではないでしょうか。

私は、アメリカでの生活を経験し、将来は外交官として誰かの役に立ちたいと思うようになりました。私にできること、私にしかできないことで、世界に貢献したいです。